

【目次】

第一話…境界線の証明

第一・五話…しゅんしゅん編

第一・五話…ニコ編

第二話…渴望の境界線

第二・五話…しゅんしゅん編

第二・五話…ニコ編

第三話…境界線の所在地

第三・五話…しゅんしゅん編

第三・五話…ニコ編

第四話…壊れた境界線

第四・五話…しゅんしゅん編

第四・五話…ニコ編

第五話…境界線の行方

第一話…境界線の証明

自動ドアが開くたびに、梅雨入り前の湿った午後の風が、冷房の効きすぎた店内に流れ込む。

入口に近いボックス席に座る大柄な男は、運ばれてきたコーヒーの表面に映る、天井の蛍光灯を眺めていた。

次に彼は、机の上に置いた自分の腕を見つめる。きれいに縫製された袖口のステッチを、一つ、二つと数える。その運針の均一さだけが、この落ち着かない店内で唯一、彼に確かな輪郭を与えているようだった。

「……あの、しゅんしゅん、さん？」

不意に届いたその声は、低く、どこか所在なげだった。

顔を上げると、そこには金髪を高めのお団子ハーフツインにまとめた女が立っていた。健康的な小麦色の肌。小さな画面の中で見ていた「ニコ」が、すぐ目の前にいる。

オーバーサイズのアウターをすつぽりと羽織っているせいか、その姿はよりいっそう小柄に見える。

しゅんしゅんは軽く頷き、向かいの席を勧めた。

彼女は音を立てないよう、静かに腰を下ろす。

厚手のデニム生地から、初対面の緊張で上がった彼女の体温が、微かに伝わった気がした。

テーブルの上に置かれた両手。ネイルのされていない綺麗な地爪と、耳元に並ぶいくつものピアスが、店内の光を反射している。

「初めまして。……本物は、思ったより小さいんですね」

しゅんしゅんが落ち着いた声でそう告げると、彼女は困ったように、けれど少しだけ眉を下げて小さく息を吐いた。

彼の視線が、彼女の羽織っているデニムに止まる。

「大戦モデルですよ。よく似合ってます」

ひけらかすことのない、静かな声だった。

不意に投げかけられたその言葉に、ニコは弾かれたように顔を上げた。

「……詳しいんですね」

丸く見開かれた瞳には、明らかな動揺と、それ以上の安堵が入り混じっていた。

しゅんしゅんが静かに微笑んだその時、タイミングよく現れた店員が二人の間の空気を区切った。ニコは少しだけ慌てたように、冷たいミルクティーを注文する。

運ばれてきたグラスの表面に、店内の冷氣と相まって、たちまちびつしりと結露が張り付いた。

カラン、とストローで氷をかき混ぜる音が響く。彼女は濡れたグラスを両手で包み込むようにしながら、ポツリと口を開いた。

「今日はわざわざ、ありがとうございます。あの……私、ファンサイト、もう辞めようと思ってるんです」

グラスを見つめる彼女の表情は、画面越しに見ていた強気な態度とはまるで違う、自信なさげなものだった。

「最初はただ、コスプレが好きで……自分のペースでやって楽しかったんですけど。だんだん、しんどくなっちゃって」

彼女は言葉を選ぶように、ゆつくりとストローの先を見つめた。

「一万円のプランも……しゅんしゅんさん、すぐに加入してくれたのに、全然更新できな

くて本当にごめんなさい。……どんなものを載せたら喜んでもらえるのか、すっかりわからなくなっちゃって」

彼女はそこで言葉を切ると、結露したグラスからゆっくりと両手を離した。

冷えきったはずの指先が、微かに赤みを帯びている。

小さく息を吸い込む音が聞こえた直後、伏せられていた視線が上がり、初めて彼を真っ直ぐに捉えた。

「だから、最後に直接お礼をして、終わりにしようって決めてきたんです」

張り詰めた、けれど確かな輪郭を持った声だった。

「もし、この後お時間があれば……衣装、いくつか持ってきたんです。場所を移して、最後に私の姿、見てくれませんか？」

しゅんしゅんはすぐには頷かず、手元のカップに静かに手を伸ばした。

すっかり冷えきったコーヒーを、音を立てずに喉の奥へと流し込む。コトリ、と陶器が擦れる小さな音が鳴った。

「……辞めるのは、もったいないですね」

独り言のように短くそう告げると、彼はテーブルの端に置かれた伝票を手に取り、二人

は店を出た。

先に立つて歩く彼の背中では、想像していたよりもずっと大きく、そして冷やややかだった。梅雨特有のぬるい湿気の中を、どちらからともなく並んで歩く。ニコは大きめのトートバッグのストラップを両手でぎゅつと握りしめていた。すれ違う他人の目線が、今の自分たちの歪な関係を暴いていくような錯覚に陥る。

「ここでもいいですか」

しゅんしゅんが立ち止まったのは、繁華街の路地裏に佇む、無機質なホテルの前だった。二人はフロントで簡単な手続きを済ませ、鍵を受け取ってエレベーターへと向かう。

その一連の動作に、彼は迷いを見せなかった。

エレベーターの狭い密室で上昇の重力を感じる間も、二人の間に言葉はなかった。ただ、冷房で冷えきったはずのニコの指先だけが、じつとりと汗をかき始めていた。

重厚なドアが背後で閉まり、オートロックが低く、決定的な音を立てた。遮音された薄暗い室内には、ただ二人の呼吸音だけが微かに落ちていた。

「……自分から誘っておきながら、なんだか急に、ドキドキしてきました」

部屋の中央で立ち尽くしたまま、ニコが消え入りそうな声で口を開いた。

長めの袖口をぎゅつと握りしめる指先から、痛いほどの緊張が伝わってくる。しゅんしゅんは平然を装い、ゆつくりと部屋の明かりを調整しながら「無理はしなくていいですよ」と短く返した。だが、彼自身もまた、この密室で彼女の熱を帯びた匂いを直接浴び、確かな昂ぶりを感じていた。

ニコはベッドの端に置いた大きめのトートバッグに手を入れた。

「いくつか、持ってきたんです。いつもファンサイトを着てるような、無難なものばかりなんですけど……」

言いながら、彼女はベッドの上に衣装を並べていく。着崩した制服や、露出の少ないメイド服。そんな中、ふとしゅんしゅんの視線が、端に紛れ込んでいたグレーの布地に止まった。

見慣れたロゴの入ったウエストバンド。カルバンクラインのアンダーウェアのセットアップだ。

「これで、お願いできますか」

しゅんしゅんは迷わず、そのグレーの布地を指差した。

「……えっ」

衣装を並べていたニコの手が、ピタリと止まった。

思いがけないものを指摘された戸惑いと、何かを躊躇うような数秒の沈黙。

「これ……前に家で着てみたんですけど、全然似合わなくて……」

彼女は困ったように眉を下げたが、しゅんしゅんが静かに見つめ返しているのを確認すると、小さく息を吐いた。

「……でも、これがいんですよ」

やがて彼女は諦めたようにそれらを胸に抱え込むと、バスルームへと小走りで消えていった。

すりガラス越しの明かりが点き、微かに衣擦れの音が響く。しゅんしゅんは上着を脱ぐと、備え付けの椅子に深く腰掛け、静かにその時を待った。

音が途絶れ視線が自然とバスルームの扉へと固定される。

部屋の中を支配する完全な静寂。耳の奥で次第に大きくなる自らの鼓動だけが、他の一切をかき消していくような感覚に陥った。

カチャリ、

小さな金属音が不安そうに響いた。

カルバンクラインの上に申し訳なさそうにジャケットを羽織ったニコが姿を現した。

「……すみません。やつぱり、怖くなっちゃって。実は自分の肌に……自信がなくて……」

言い切らぬまま、視線を落とす。

しゅんしゅんは椅子に深く腰掛けたまま、静かに、諭すように伝えた。

「無理はしなくていいよ。……でも、嫌じゃなければ僕には見せてくれないかな？」

ニコは小さく息を吐くと、ジャケットのボタンに指が掛けられた。ゆっくりと左右に開かれるデニムの隙間。

西日の差し込む光の中で、徐々に明かされる小麦色の肌。首筋から胸元まで、褐色の肌の上でグレーの生地が健やかに存在している。

だが、お腹の部分の肌だけが、服の影に隠されながらも、褐色の肌とは違う、初々しい白さを含んで、ぼんやりと白んで浮いて見えた。

「……これ。昔、子供の頃に海へ行つた時の跡なんですけど。……あれから何年経つても、私の身体、白く戻れなくなっちゃったんです。どれだけ冬が来ても、ずっと、この浅黒い肌のままで……。」

自嘲するように小さく笑う。だが、その瞳には明確な諦念と、自分の身体に対するおぞましが滲んでいた。

「……おかしいですよ。まるで呪われてるみたいで、自分の身体なのに、ずっと気持ち悪くて。……だから、ファンサイトも、」

彼女の身体に、傾いた西日のオレンジ色が突き刺さる。光の角度によって、その肌の境界線は、残酷なまでの鮮明さで浮かび上がった。

「——すごい。……魅力的ですよ、ニコさん」

しゅんしゅんの声には、確かな熱がこもっていた。

「その、光を吸い込むような褐色の肌も。……そして、その奥に隠されていた、誰の目に

も触れてこなかった瑞々しい白さも。その二つが交わる境界線は、息を吞むほど美しい」
彼は取り乱すことなく、むしろ酷く冷静に、けれど狂おしいほどの熱を孕んだ瞳でニコを見つめた。

「教えますね。……君のその呪いのような肌を前にして、私がどれほど、準備万端か」
静かな、けれど熱を帯びたその告白に、ニコは息を呑んだ。

「やめるのはいつでもやめられます。だから、僕の言う通りに動画を撮りましょう。君のその肌が、どれほど人を惹きつけるか、僕に証明させてください」

ずっと一人で抱えてきた、自分の身体のいちばん頼りない部分。それを「美しい」と渴望する彼の熱い瞳が、ニコの胸の奥を不思議なほど静かに、確かに満たしていく。

しゅんしゅんは椅子から立ち上がると、ニコに機材のセッティングを指示した。彼女は勢いに抗えず、けれどももう迷うような視線はどこにもなく、スタンドを立て、ライトを点け、スマホを固定していく。

西日と照明が混じり合う中、レンズの向こう側で、彼女の境界線がさらに際立っていつ

た。

セッティングを終えたニコの前に、しゅんしゅんは一本のボトルを静かに置いた。透明な液体が光に反射し、静かに揺れている。

戸惑う彼女の視線を受け止め、彼は穏やかに、慈しむような声で切り出した。

「すみません。今日、二人でお会いできると思うと……情けないことに下心が出てしまい、持つてきてしまいました。不快な思いをさせてしまったなら、本当に申し訳ない」

そのあまりに真摯な謝罪に、ニコは「あ……いえ……」と、毒気を抜かれたようにボトルを見つめた。

しゅんしゅんはその様子を静かに見守り、柔らかな口調のまま、一言ずつ丁寧にレクチャーを始めた。

「まずは一本目。……その褐色の胸元に、少しずつオイルを垂らしてください。十分に垂らしたら、ボトルのキャップを閉じ、置いてくださいね。そこから、両手を使って胸元のオイルを伸ばしていく。……そして、オイルの付いた手のひらでゆつくりとバストを触り、染みを広げていってほしいです。グレーのコットンの色が変わっていく瞬間を、大切にし

てください。……途中、ブラの中にも手を入れてオイルを伸ばしてください。水着の日焼け跡が映っても大丈夫ですよ。撮影中は常に呼吸を意識して。鼓動は早くなるけれど、呼吸は深く、ゆつくりとしてください」

彼は言葉を一つずつ置くように、丁寧に、かつ迷いのない響きで伝えた。

「最後は、もし嫌じゃなければ腕を上げて、腋をアップにしてください。そこに空いているほうの手で、オイルを塗り込む。君の肌なら、光を反射して、とても綺麗に映るはずだ。……それでは、私は後ろにいますから」

説明を終えると、しゅんしゅんは音も立てずに椅子ごと後ろへ下がり、フレームの外へと身を引いた。

静寂が、部屋の湿度を一段階上げた。

ニコは意を決したように録画ボタンを押し、カメラの前に立った。

西日が彼女の輪郭を黄金色に焼き、指示通り、ボトルの先から透明な雫が胸元へと滴り落ちる。

カチャリ、と小さな音を立ててキャップが閉じられ、ボトルが置かれた。ここからは、

彼女の指先だけが物語を紡ぐ。

褐色の肌の上で、オイルが濡れた光の筋を描く。続いて、オイルの付いた両手がグレーのブラの膨らみを包み込んだ。清潔だったコットンが吸い込んだオイルを広げるように、ゆつくりと、手のひらでなぞっていく。一点から始まった灰色の染みが、彼女の指の動きに合わせて重く、澱んだ色へと侵食していく。

やがて彼女は、意を決したようにブラのカップの隙間に指を滑り込ませた。

「……っ、ふ……」

自身のコンプレックスである白い肌を、褐色の指先がオイルと共に撫でる。ニコの肩が小さく跳ね、喉から短い吐息が漏れた。

高鳴る鼓動に引きずられ、呼吸が浅く、速く乱れそうになる。だが、フレームの外で見守るしゅんしゅんの「深く、ゆつくり」という呪縛のような言葉が、彼女の理性を繋ぎ止めた。

乱れようとする呼吸を、喉元で必死に押し殺し、深く、長く吐き出す。その葛藤によるわずかな震えが、かえって肌に張り付いたブラの生々しさと、彼女の内に秘めた熱を強調させていた。

最後に、彼女は震える腕を高く上げた。

露わになった腋の窪みへ、オイルの付いた手でゆつくりと触れる。

ヌラリと光を反射するその曲線は、西日のオレンジ色の中で、恐ろしいほどの熱量を孕んで記録されていた。

一度、録画が止まる。

しゅんしゅんは椅子に深く腰掛けたまま、静かに熱を逃がすように吐息をついた。

「素晴らしいと思います……。想像以上です、ニコさん」

その声は穏やかだが、どこか湿り気を帯びて重く室内に響いた。ニコはベッドの端で、肩を上下させて呼吸を整えている。夕闇が迫り、室内の影はより深く、長く伸び始めている。

しゅんしゅんは距離を保ったまま、二本目のレクチャーを始めた。